



TITLE:

心臓外科領域におけるCoronary spasmとその意義

AUTHOR(S):

伴, 敏彦

CITATION:

伴, 敏彦. 心臓外科領域におけるCoronary spasmとその意義. 日本外科宝函 1982, 51(1): 1-2

ISSUE DATE:

1982-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/208924>

RIGHT:

 話 題

心臓外科領域における Coronary spasm とその意義

小倉記念病院心臓血管外科

伴 敏 彦

最近、虚血性心疾患における coronary spasm の重要性が指摘され、1つのトピックとして取り上げられてきている。

1959年、Prinzmetal 等は、心電図上 ST 上昇を伴いしかも安静時に発作を来す 3 症例を報告し、これを Variant form of angina pectoris として記載した。これらの症例はいずれも、冠動脈硬化はみられるものの、当該冠動脈の Tonus の一時的増強がその原因と考えられた。この報告は冠動脈造影法の導入される以前のものであるが、coronary spasm の最も classical なこの paper に協同研究者として和田敬博士の名がみられる。その後、冠動脈造影法の普及によりこの Variant angina が coronary spasm により起こること、更には器質的には殆ど変化のない冠動脈にも起こることが明らかになってきた。異型狭心症は特に本邦に多いことから、この方面の研究は我が国で欧米に先がけて行なわれ、重要な報告が数多くなされている。特に京大出身である静岡市立病院内科の泰江弘文博士の一連の研究は、coronary spasm の文献を読めば必ず引用されていると云っても過言ではない。その後の研究で、心電図上の ST 変化は単に vasospasm の程度によって決まり、完全閉塞となれば ST 上昇を、高度狭窄の場合は ST 下降を示すことが明らかとなり、1978年 Maseri は、vasospastic myocardial ischemia なる概念を提称した。

当院で冠動脈外科を開始した当初、内科との conference 等で coronary spasm の存在を知るようにはなったものの、外科医としてさして興味をひかれる問題ではなかった。ところが、冠動脈バイパス手術の成績も安定してきた 2 年め位（昭和52年）から、思わぬところで vasospasm の問題に注目せざるを得ないこととなった。最初の出会いは、術中の強烈な vasospasm の attack から台上死寸前まで陥った症例を 2 例続いて経験したことであった。これらは、いずれも左前下行枝の一枝病変で、不安定性狭心症の症例であり、人工心肺離脱直後から殆ど器質的病変のない右冠動脈領域にくり返し来す ST 上昇と AV-ブロック、血圧低下の発作により台上死寸前まで至ったものであった。丁度この頃、当院循環器内科が延吉部長を中心として coronary spasm の問題に積極的に取り組んでいた時でもあり、内科と協力して冠動脈外科での coronary spasm の問題に取り組むようになった。その結果、1) 手術の絶対適応とされている不安定性狭心症の内に coronary spasm がその主因となっているものが含まれ、しかもそれは一枝病変の症例が多い。2) このような症例に手術を行なうと手術死の危険があるのみならず、術中、術後に coronary spasm の attack を来した症

TOSHIHIKO BAN: Coronary Artery Spasm. Its Significance in the Field of Cardiac Surgery
Department of Cardiovascular Surgery, Kokura Memorial Hospital, Kifune-machi 1-1, Kokura-kita-ku, Kitakyushu, 802, Japan.

Key words: Coronary artery spasm, AC-Bypass, Perioperative infraction, Myocardial factor.

索引語: 冠スパズム, AC バイパス手術, 術中心筋梗塞, 心筋因子.

例での perioperative & postoperative infarction の頻度が極めて高い。以上のことが明らかとなった。従って現在では術前 vasospasm 合併症例では先ず内科的治療で spasm を完全に抑えた時期に手術を行なうようにしている。術前診断には冠動脈造影時での Ergonovine による誘発試験が最も有効である。一方、以前より弁膜症でも手術中に心筋梗塞を来たことが知られており、これは術中の心筋保護に問題のあったものとされていた。しかし最近の心筋保護の進歩にもかかわらず弁膜症手術に際して、perioperative infarction のみられる場合がある。われわれも高令者の弁膜症、先天性心疾患で vasospasm を合併した症例を経験している。以前から弁膜症の手術死の原因として myocardial factor ということが云われているが、その内の一部に実は vasospasm の関与するもののあることに注目する必要がある。更に最近の当院での心筋梗塞急性期の冠動脈造影の経験から、この時期にも vasospasm の関与の多いことが明らかとなってきた。これは心筋梗塞急性期での AC バイパス手術の適応決定にも関与することでもあり、今後内科との密接な協力の上に、心臓外科領域での coronary spasm について検討していきたいと考えている。